

寺子屋だより

※題字／森川芳聲

もくじ

- 2 巻頭言 「平和教育」を
問い直す……………山口 秀範
- 3 小中一貫校「志明館」
二年目を終えて……………八尋 太郎
- 4 偉人レポート……………武澤 陽介
- 6 「この一冊」—『史記』(司馬遷)……………小田村 初男
- 7 母のこと伯母のこと⑤……………高見澤 玉江
- 8 鄙爺日記その⑥……………猪部 敬彦
- 9 東京裁判下の竹山道雄②……………廣木 寧
- 10 TERAKOYAふおとれぽーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 山とものがたり(6) 余録



嵐山

京都市右京区嵐山

※詳しく解説は12頁に掲載しております。

「平和教育」を

問い直す

代表世話役

痛ましい犠牲

去る三月十六日沖繩県辺野古沖で、研修旅行中の高校生を乗せた小型船が転覆して、女子高校生が死亡するという実に痛ましい事故の報に接しました。那覇市に近接する「世界一危険な飛行場」——米軍普天間飛行場——の移設先として整備が進められているのが名護市辺野古の海上埋立工事です。

基地反対の運動を続ける団体が所有する船に生徒だけに乗せ、監督責任を放棄していた学校側の姿勢には弁解の余地ありませんが、そもそも研修目的の「平和学習」とは何かに目を向けてみましょう。

平和教育とは

文部科学省は平和教育を次のように定義しています。

「人間の生命の尊厳の思想に基づき、人間の生命を否定する一切の力、特に戦争に反対し、平和を愛し、平和を築く人間に育てること」(広島平和教育研究所 1981)

①戦争に反対し、②平和を愛し、③平和を築く人間になる、の三つをバランスよく教えれば、動乱の世界にあっても日本の平和を守る国民が育つていきます。ところが全国の学校現場では、戦争の悲惨さを子供たちに植え付けることのみが「平和学習」の内容となつて久しいようです。

ある私立小学校で昨年こんな一幕がありました。公立の教諭経験豊富な先生から出された「平和教育」の授業計画は「福岡大空襲と八幡空襲の日には、八十年



第二次世界大戦後の世界紛争(2010年時点)

山口 秀範

前の悲惨な出来事を朝の会で伝えること」でした。果たしてそれだけで平和な世の中を現実でできるでしょうか。前述の①戦争に反対する心情は喚起しても、凡そ③平和を築く智恵へは結びつきません。「戦争を叫び続ければ平和は守られる」という根拠なき安全神話が通用したのは、世界の中で実は戦後日本だけだったので。

世界の現実

添付した図は第二次大戦後発生した国際紛争の一覧です。そして現在も各地で戦争は継続中です。その中であつて我が国に八十年間の平和がもたらされた原因は何だったのでしようか。一つはあのみりにも激烈な戦いに敗れたことによる国民全般の「戦争忌避感」、もう一つは勇敢で精強な日本軍の復活を阻止する国際情勢を主導したアメリカ及び近隣諸国(主として中共と朝鮮)の思惑が偶々致した結果だったと私は考えています。

現に我々の欧米友好国でも、イギリスはフォークランド紛争、フランスはアルジェリア独立戦争、ドイツはベルリンの壁構築から崩壊まで、そしてアメリカは二十年に及ぶベトナム戦争と、それを凌ぐ長さのアフガン紛争を経験してきたのです。戦後八十年の半分以上をアメリカの若者は戦地に赴き、そして今も新たな紛争の種は尽きません。日本以外の各国は戦争への備えを常にしつつ平和を模索して来たのです。

時代遅れの平和教育

では戦後の日本で誰が平和教育を先導したのでしょうか。私の学生時代を思い出すと、所謂進歩的文化人と呼ばれた学者・評論家の多くは「アメリカこそが戦争を起す元凶で、ソ連・中共は平和勢力だ」とレッテルを貼り、「戦前戦中の日本軍の過ちを反省し、アメリカの軍産複合体に巻き込まれなければ平和は維持される」と世論を誘導して行きました。そしてそれをそのまま学校現場に持ち込んだのが「日教組」だったのです。

「日本教育新聞」によれば、「平和学習は戦争の悲惨さを学ぶことを目的とし、広島・長崎への原爆投下、沖繩線など日本の戦争体験を学ぶ」と定義しています。日教組教師の倫理綱領にあるスローガン「教え子を再び戦場に送るな」も自分たちが平和を唱えさせたいれば、火の粉は降りかからないと、ある意味極めて楽観的に子供たちを導き続けて今日を迎えています。

しかし進歩的文化人や日教組幹部が信奉したマルクス主義は現実世界で破綻して久しいし、戦争の実相もサイバーやドローンによる攻撃や虚実入り乱れる情報戦など戦場だけの攻防ではなくなっています。

父祖たちの命がけの体験を風化させてはなりません。将来の戦争の芽を摘むには物心両面の防衛意識を高めることが平和教育の中心にならざるを得ないでしょう。今回の理不尽な事故で失われた若い命に報いるためにも、時代遅れの平和教育を根本的に見直す機会にしなければなりません。

平和論にたいする疑問

先ほどから述べている戦後の風潮と戦った人も少数ながらいました。文芸評論家の福田恒存は世を風靡する安易な平和論に疑問を投げかけ続けました。

人間社会から戦争は永遠に消えてなくなるならいせう。同時に、平和も、平和を望む気もちも永遠に存続するでせう。平和論者は：平和を望んでゐるのは自分たちだけだと思つてゐます。あるいは、戦争の悪に気づき、それを防いで平和を招来せしめようとする試みは、二十世紀後半にのみ現れた新運動だとおもつてゐます。(「戦争と平和と」昭和三十年)

こう警鐘を鳴らし、平和論者たちの空想的思考と傲慢さを指摘しています。

戦争と平和とに関するかぎり、私たちはかれら(昔の人間)よりすこしも進歩してはゐないし、今後進む歩することはありえないでせう。(同右)

こうした先達の言葉にふれ、謙虚に歴史から学ぶ姿勢がこころでも求められています。